



統計から社会の実情を読み取る

第42回 頼れるものは家族だけなのか

本川 裕 | Honkawa Yutaka
アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。側国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、「統計データが語る日本人の大きな誤解」(日本経済新聞出版社、2013年)等。

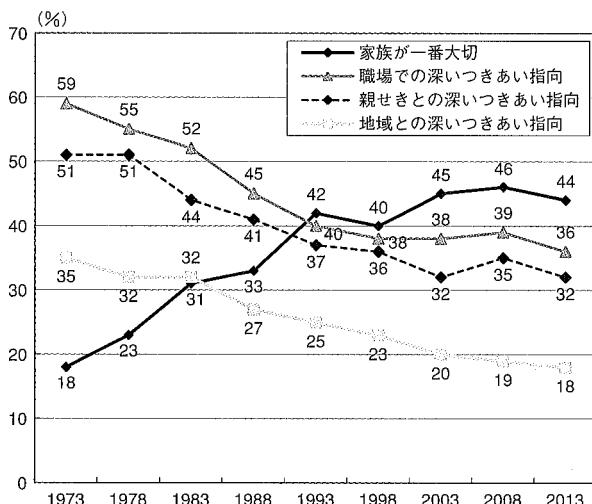


社会関係の希薄化と反比例して高まる家族の大切さ

人と人との社会的な絆が薄れてしまっていることを感じている者は多いであろう。こうした傾向を示す意識調査の結果を図1に示した。職場や親せきや地域との全面的な深いつきあいを望む者の比率は、この40年間でどんどん減少し、直近の2013年調査の結果は、最低、あるいは最低タイを記録している。一方、これと対照的に、家族が一番大切と考える者は大きく増えてきている。

地域の人々が自分たちで守ってきた安全が、警察が提供する公共サービスや警備会社の有料サービスで守られるようになったという変化に象徴的に示されている通り、社会的な絆の希薄化と政府機能の向上や市場経済の発展は、相互補完的に進行している。これが、人々の自由や利便性を増大させているという点からは、必ずしも悪い傾向とばかりは言えないが、一方で、公共サービスや有料サービスに過剰に依存しそうになると、災害

図1 高まる家族の大切さと希薄化するその他のつきあい



注) 「家族が一番大切」の比率は統計数理研究所「日本人の国民性調査」(20歳以上80歳ないし85歳未満の成人対象)による。あなたにとって何が一番大切なかという問い合わせに対する自由回答を整理したもの。深いつきあい指向の比率はNHK放送文化研究所「第9回『日本人の意識』調査(2013)結果の概要」による。それぞれ「職場の同僚」、「親せき」、「隣近所の人」とのつきあいにおいて、形式的、部分的でなく全面的なつきあい、「なにかにつけ相談したり、たすけ合えるようなつきあい」を望ましいとする者の比率。

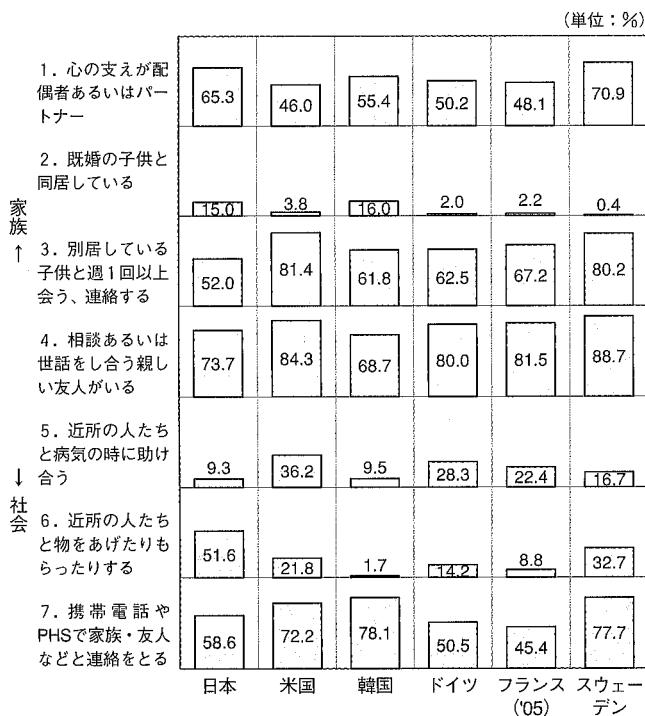
資料) 統計数理研究所「日本人の国民性調査」
NHK放送文化研究所「第9回『日本人の意識』調査(2013)結果の概要」

など、それらでは対応に限界がある事態が起こったときのリスクが大きくなる。また、外から提供されるサービスでは代替できない社会関係自体がもたらす精神的な充足感が得られなくなってしまう。こうしたことから、人々の不安が増大していることも確かであろう。

家族の大切さの高まりについては、もっぱら同居家族に期待がかかりすぎると、期待はずれに終わったときのショックを緩和する機会が失われてしまうという危険があるようと思われる。人間関係の大切さ自体が、もっと多元的であってよいようと思われる。

次に、こうした日本の状況が、国際的に見ても、非常に目立っていることを示すデータを紹介しよう。

図2 高齢者的人間関係の国際比較



注) 各国60歳以上の男女が対象(施設入所者を除く)。複数の問い合わせへの回答結果を合わせて一つの図とした。3は別居している子供のいる人に対する問い合わせ、5~6は近所の人たちと週1回以上お付き合いをする人に対する問い合わせ。2については、日韓・スウェーデンは男の子供、米・フランスは女の子供との同居の方が多い(ドイツは同数)がその値。

資料) 内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」(2010年調査、仏のみ'05年)

同居家族への依存度の高い日本の高齢者

内閣府では、各国の60歳以上の高齢者を対象に「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」を1980年から5年ごとに行っている。ここでは、最近の調査結果から、高齢者的人間関係についての各国の特徴について、複数の設問の結果を使って整理した(図2参照)。

高齢者的人間関係については、身近さの程度に応じて同心円的に、夫婦→同居している子供→別居している子供→親しい友人→近所の人たち、といった順で構成されていると考えられる。これらについて、各国の高齢者がどの程度の密度で関係を結んでいるかを見てみよう。若いうちは職場の人間関係も重要であるが、高齢者が対象なのでここでは省かれている。

結論から述べると、日本の高齢者は、他国の高齢者と比べ、同居している夫婦や子供との相互依存の程度は大きいが、別居の親族、友人、あるいは近所の人たちとは相対的に薄い人間関係の中で暮らしている。どの国も、人間関係の同心円の真中に近いほど密度が濃く、周辺にいくほど密度が薄くなるのが通常であるが、日本の場合、その傾斜度が非常に大きい。

まず、最も身近な夫婦関係であるが、日本とスウェーデンの高齢者は「心の支え」として夫婦をあげる者の比率が最も高い。また、図には示していないが「心の支え」の設問では、この両国のみが夫婦をトップにあげているのに対して、他の国は総て子供をトップにあげているという違いがある。

次に同居の子供であるが、既婚の子供と同居している高齢者の割合は、日本は韓国と並んで15%前後となお高く、

欧米が4%未満であるのに対して、子供との同居が多い点が特徴である。

それでは別居している子供との関係であるが、週1回以上会うかどうかの比率を見ると、日本の高齢者の場合、52%と最も低く、関係が薄い点が特徴である。米国やスウェーデンは別居の子供と週1回以上会う高齢者が8割以上と非常に高いのと対照的である。

親しい友人（親友）との関係では、相談あるいは世話をし合う親しい友人がいる高齢者は、日本の場合、韓国と並んで、欧米よりやや少ない。

近所の人たちとの付き合いについては、物をあげたりもらったりする関係においては、日本の場合、高い比率（51.6%）を示すが、いざというときや病気のときの助け合いを聞くと9.3%であり、韓国と並んで、その他の国（2～4割）に比べ格段に低くなっている。日本の場合、近所の人たちとの濃密な関係は少ないとみられる。

日本の高齢者が携帯電話で家族や友人と連絡を取り合う比率も比較的低い。これには、同居している夫婦や子供との関係以外では人間関係の密度が薄いことを反映している面も無視できないだろう。

このように、日本の高齢者の場合、同居している夫婦や家族以外の人間関係が他国に比べ希薄であり、その分、夫婦や同居家族への期待が大きい点が大きな特徴となっている。スウェーデンは夫婦のつながりも深いが、別居の子どもや友人、ご近所とも日本より深いつながりがあり、夫婦に特化していない点で日本とはパターンがやや異なる。

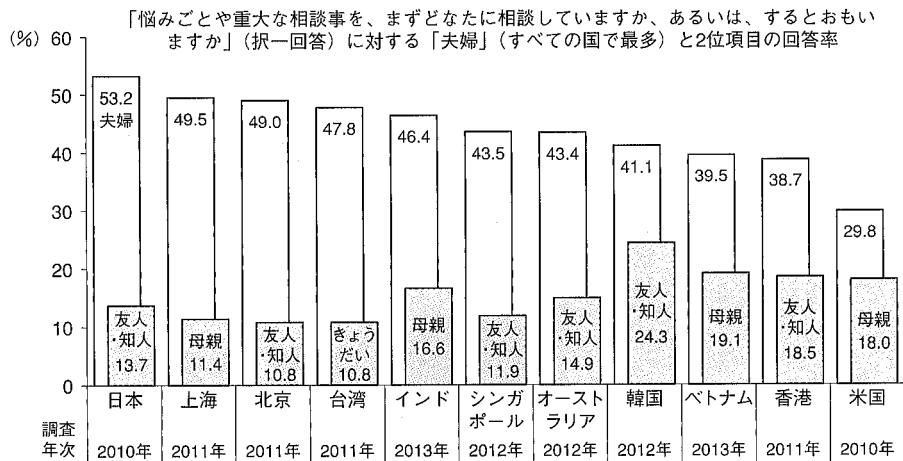
日本社会の絆の希薄さについては、「構造改革」が進んで非正規雇用者が増加し、戦後の日本社会で重要性が増した企業帰属を通じた社会の絆が失われた結果、顕著となったと説明される場合が多い。しかし、薄れたのは職場の人間関係だけではない。夫婦や同居家族の親密さとそれ以外の

社会関係の薄さという日本の特徴は、むしろ、日本固有の存在だった家制度の影響を考えないと理解できないだろう。人類学者の中根千枝によれば、日本では、親子関係にある2夫婦が同一の家に住む「家」制度のもとで、別居している子どもが親を訪ねる習慣は発達しなかったという。「別居してしまうと関係が疎遠になります」として、むかしば長男が親を見るということでしたから、兄弟姉妹が連帯して親を見るという習慣も発達しなかったのです。（中略）親のほうも、一緒に住んでいる娘（あるいは息子）には遠慮がなくとも、別居している息子・娘たちに対しては遠慮するというのがつねです。ここに、日本に古くから慣習となっている、「居をともにする」ということが、私たちの心理にどれほど大きく作用しているかをみることができます。」（『家族を中心とした人間関係』講談社学術文庫、1977年、p.139）

欧米では、もともと親子の別居が普通なので、別居していても親子きょうだいが協力し合う風土が残っているのに対して、日本では、核家族化の中で成人の親子が別居することになったのと並行して、夫婦以外の関係がすべて極めて希薄になってしまったという訳である。

日本の家族をめぐるこうした状況をどう考えたらよいのであろうか。日本の場合、国が用意する公共サービス（社会保障）や高齢者向けの有料サービスがそれなりに充実しているだけに、高齢者生活を安定させるために本来重要であり、自覚的に取り結ぶべき多元的な人間関係の構築において、努力不足が否めないのではないだろうか。このため夫婦の片方に先立たれたり、高齢になつて離婚すると、日本人は大変なショックを受ける。独居老人の生活の不安定さは他国より大きいと考えられる。また、同居夫婦・家族内に乱れが生じると、他に逃げ場がない分、家庭内のいさかいが深刻化するのではないか。

図3 日本の夫婦は仲良し?



注) 夫婦には事実婚の相手を含む。選択肢には図に掲げた以外に、その他家族・親戚(子どもなど)や匿名相談相手などを含む。

資料) 統計数理研究所「アジア・太平洋価値観国際比較調査」

日本の夫婦は仲良し?

次に、日本では、夫婦以外の社会的な絆が弱い分、高齢者以外でも夫婦の絆が強いことを示すデータを紹介しておこう。

悩み事や相談事を、まず、誰と相談しているかという点についての国際比較意識調査の結果を見ると、アジア・太平洋の11か国・地域の中で「夫婦」をあげる回答率は日本が最も高く、日本ほど夫婦がよく相談し合う国はないことが分かる(図3参照)。これについては、単純に、日本人の夫婦ほど仲がいい夫婦はいないと考えても間違いでないが、やはり、日本では社会の絆一般が希薄になっていて、夫婦以外に相談すべき相手が少ないという側面が大きかろう。

日本人の夫婦関係が非常に緊密なのは、夫婦が「家」の外の人々に頼りにくくこともあって、「家」を守る同志関係をむすんでいた伝統が長いからだと考えられる。また、核家族化が進み、成人した子が親と同居しなくなり、相談相手が夫婦に限定されてしまったことがこれに拍車をかけたためとも考えられる。東京新聞の「つれあいにモノ申す」という投稿コラムは、日本人の夫婦関係

をよく映し出している。例えば「伯父の葬儀に参列したこと。大勢の親類に会った後、夫が小声で『次からは髪の毛を染めてこい。おれが苦労させているように見られるだろ』とのたまつた。その通りよ。絶対に染めないわ。(もっと楽がしたい妻・65歳)」(2013年3月27日)。こうした夫婦の関係も、外部に対して協力して「家」の体裁を保とうとする気風から説明すると分かりやすい。欧米人の夫婦ではこんな会話がありうるであろうか?

日本社会の閉塞を打ち破って、夫婦に限定されない家族や社会の絆を取り戻す必要があるとすれば、家督相続時代の古きよき家族の伝統を取り戻そうというムード的な保守主義では足りず、家制度が成立した江戸時代よりも昔へさかのぼることまで含めて、新しい人間関係のかたちを模索する必要があろう。日本の場合は、案外、有料サービスに心を吹き込む途が最短なのかも知れない。

*「社会実情データ図録」関連図録

[1] 図録1307「高齢者の人間関係の国際比較」

[2] 図録2413「家族や親戚・職場・近所の人等とのコミュニケーションの推移」